書き抜き読書ノート 2253	2018 年 8 月 27 日

河端真一著「3 万人を教えてわかった 頭のいい子は「習慣」で育つ」ダイヤモンド社 2018 年 7 月 18 日刊を読む

要領だけをよくしてはいけない

１．今の子どもは、豊かな時代に育っています。しかも子どもの数が少ないので、とても大事に扱われ、保護者や祖父母からもいろいろなものを買ってもらえます。
　たとえば、参考書。子どもたちは参考書や問題集の類いをたくさん持っています。勉強に関するものならいいだろうと、保護者がお金を惜しまず買い与えているからです。
　ものに恵まれていることは一見、喜ばしいことのように思えますが、そのような環境に育つことで失われてしまうものはたくさんあります。

２．「韋編三絶」という言葉をご存じでしょうか。
　１冊の本をボロボロになるまで熱心に読むことのたとえです。
　孔子という人が、竹でできた書物を繰り返し読み、綴じていた紐が何度も切れてしまったという中国の故事に由来しています。
　私は、現代の子どもにも、**韋編三絶するほどに参考書やテキストを読み込む体験をさせてあげるべき**だと考えます。

３．全ページを暗記するほど繰り返し読んだ参考書は、本当にボロボロになります。ページを開けばアンダーラインや書き込みがたくさんあって、決してきれいな状態ではありません。
　でもそれは、自分が一生懸命勉強したことの証しです。
　そのように読み込んだ参考書には愛着が湧き、ずっと取っておきたい宝物となります。将来読み返したときには、自分が懸命に勉強したことを懐かしく思い出すことでしょう。

４．今の子は、そのような経験をすることがあまりありません。参考書ならいくらでも買ってもらえるので、１冊を使い終わる前に新しい参考書に手を出してしまいます。
　同じ項目であっても参考書によって説明の仕方は異なりますから、自分にとってわかりやすいほうを「いいとこ取り」すれば要領よく知識が身につくという考え方もあるかもしれません。

５．しかし、「１冊の参考書すら読み込めない」ということは、消化不良の状態で放棄するということになります。
　次々と新しい参考書に乗り換えれば、どの参考書も中途半端にしか理解できないまま終わってしまいます。

６．それよりも、これと決めた１冊の参考書を徹底的にやる。「全ページ暗記した」「この参考書に書いてあることがテストに出たら絶対に答えられる」と言い切れるくらいまで読み込む。そう

することで、参考書の内容を頭に叩き込むことができ、テストでも得点につながるのです。

実際のところ市販の参考書はどれも、受験に出る範囲に絞って書かれています。どれを選んだとしても、１冊の参考書を丸ごとやり遂げれば、受験対策としては十分です。あれこれ手を出す必要はありません。

７．**一つのことに絞り切れずに、あれこれと手を出してしまう。これは、保護者の影響が大きい**のです。

たとえば、塾や学校を選ぶときに、今の保護者はとにかく右往左往しがちです。どの塾がいいのか、どの先生の教え方が一番上手なのか。大学受験を有利にするにはどの中学校に行くのがいいのか……。

世にあふれるたくさんの情報に惑わされて、あっちへ行ったりこっちへ行ったり。要領よくこなそうとするあまり、かえってどれも中途半端になってしまう。そこには確固たる信念があるように思えません。

８．原因は国の教育政策にもあります。日本の教育政策は、目先の課題ばかりを追って、「やれ話す・聞く英語だ」「やれアクティブラーニングだ」「やれプログラミング教育だ」と、ころころと変わりがちだからです。

保護者は、そんな情報に反応して、「うちの子にもやらせなければ……」と右往左往してしまうのです。

しかし、振り回されて迷惑を被るのは子どもたちです。くるくる変わる落ち着かない環境のなかで勉強することになってしまい、学力が伸びるはずもありません。

子どもには、**安定した環境のなかで、じっくりと集中して勉強に取り組ませてあげるべき**です。「どこの塾がいい」とか、「どの参考書がいい」というのは非本質的なことです。

９．**勉強の本質は、「するか」「しないか」です。**

そして、「する」のであれば、まずは、前述した「計算・漢字・英単語」といった基礎を徹底的にやる。参考書を使うなら１冊に絞って読み込む。そのような信念を持った勉強の仕方が必要なのです。

これと決めた１冊の参考書を徹底的にやることで、内容を頭に叩き込むことができ、得点につながる。

P48 ～ 52

＜コメント＞

進学塾ｅｎａ学院長の河端真一先生の最新の教育論。効果の上がる勉強の仕方は、とても参考になります。是非、手に取ってご一読を。

― 2018 年 8 月 27 日（月）林明夫―